

からも花巻駅からも約五里（二十キロ）です。家では父母も健在、兄弟男三人、女一人で、軍隊に関係あったのは私一人でしたので、皆で無事を喜び合うことが出来ました。

思えば満州へ出発してからもう五十年になろうとしています。半世紀も前のことですので記憶も定かでないが、私の奇しき思い出であります。

### 東安病馬廠隊員

## 農奴となり、奇跡の生還

岩手県 角野 喜三郎

支那事変の始まる前の昭和十二年春の兵隊検査で甲種合格。ところが籤のがれ、定員オーバーということで現役入営はしませんでした。昭和十年徴集兵です。私は大正五年三月六日に当時の岩手県九戸郡大川目村（現在の久慈市大川目町）で生れたのです。

戦争の中期、昭和十八年五月五日召集で、弘前の北

部第十六部隊に入り、一週間後満州東安省宝清の騎兵第三旅団第二四連隊に入隊しました。当時もう騎兵隊の大部分は搜索連隊になり機械化されていたのですが、第二四連隊は本場の乗馬隊で馬が二百頭ぐらいいたと記憶しています（第二三連隊は騎砲隊）。

最後の騎兵旅団で初年兵教育を受けたのです。一期三か月は歩兵の訓練、二期からは乗馬を主体とした訓練です。私は農家で家に馬がいたので馬には馴れていたが、軍隊の教育はそんな生やさしいものではなかったのです。

二期の教育が終わったら蹄鉄工の教育が六か月ぐらい。教育はさらに厳しい、工務兵の下士官から目玉を喰う。蹄鉄を馬の蹄に合わせるのだが型がうまくいかない。鉄を焼いては打ち、打っては焼く、そのうちに釘の穴も無くなり苦労した。六か月でようやく一人前になった。演習の時は、落鉄等があるので工務兵として馬に乗ってついていく。

昭和十九年七月、国境の饒河へ一個中隊二百名ぐらい移駐した。兵隊一人に馬一頭の割の編成です。ハバ

ロフスクに近いウスリー江の河岸の山の陰に兵舎があり、そこで訓練です。その辺は湿地帯があり、木を切って組んで渡るが、馬が落ちると沈んでいく、もがきながら扇状の跡を残して沈んでいく。兵隊も一緒の時もある。兵は直ぐ降りればと思うが、馬は人命より大切とさえいわれている軍隊故、そうはいかない。

饒河では、「若し敵がせめて来ても見捨てぬ」と旅団長は中隊長に言っていた。司令部のある宝清と饒河間は八十キロぐらいあったと思います。そこで、演習は馬、歩哨とか国境監視は歩兵なみ。監視哨からソ連領のトーチカや、列車の走るのが見える。河岸の望楼には絵の画ける人など何人かいて敵の様子を、毎日本部へ報告する（ソ連の動き）。向こうも丸太に銀紙を貼った操砲がトーチカの銃眼から首を出していた（独ソ戦で火砲がヨーロッパへ向けられていたか）。

こちら日本軍もトーチカや壕を掘っても、砲がなく操砲もあった。積んであった砲弾箱もだんだん何処かへ運ばれていったようだ。砲弾の信管を抜き箱へ詰めたりしたこともあった。昭和十九年になると弾薬の箱

の中身も無くなっていました。

日ソ不可侵条約があり関東軍は安心したのか、南方へ送ったのか、国境兵備は弱くなりました。いくら陣地構築しても兵器、弾薬がない。トンネル掘ったが何もない、穴を掘っても大砲が入っていない。兵隊同志は「若し戦争が始まったらどうするのか」と言っていた。国境警備の現場は無防備に近いので「若し今戦争が始まれば勝てない」上部から何と知らされても兵隊は勝味なしと思っていた。

私は昭和二十年五月十三日、饒河から東安の病馬廠（新部隊で炭疽、鼻疽など馬の伝染病発生のため）へ転属になりました。東安は大きな市街地で、師団司令部があり、病馬廠は司令部の近くにありました。

八月七日朝、何だか日本機でない戦闘機が編隊で飛んで来た。ソ連機ですが司令部からは何の命令も来ない。中隊長は他部隊の様子が変であると言う。何か動員命令が下ったのか移動準備をしていた。何処へ連絡してもソ連戦は知らされない。中隊長は、他隊がやっているのので出動準備を命じた。

食糧、彈薬を馬に積んだ。何とか列車でと思ったが、列車は居留邦人で満員である。八月七日夕方以降、それでも命令が来ない。將校連中は命令が来ないので、何かおかしいと話し合っていたが南下することとなった。

勃利への街道を他部隊も邦人も開拓団も南下、高い所から見ると街道を長蛇の列、先づ勃利へ行こうと南下している。部隊は上部からの命令が無いので中隊単位ぐらいで行動している。上を下への大騒ぎのうち、十四日の晩、勃利に着いた。食糧は毎日乾パンだけなので舌が痛くなる。

そのうち満州人が反乱する。それでも命令が無く情報是不明。軍の組織も、総軍からも、軍からも命令なく混乱し勝手な行動、烏合の衆でした。ソ連軍越境は勃利で何処からともない情報で知った。翌日「勃利を出発し、牡丹江へ向かへ」との命令が何処からともなく来ました。林口・古城鎮（共に東安省林口県）を通過して行けば牡丹江へ出られるというのに林口にはソ連軍戦車が何十台と来ているという。

しかし、隊長は訓示をし「林口へ」という。誰も不安で話をする者はいない。関東軍といえども今まで平和だったから特に我が部隊は病馬廠初めて戦車とぶつかると思うと体が震え、誰もそんな気持ちで言葉も発しません。暗くなるのを待って、手前の古城鎮を出発した。「林口には戦車五十両、その周囲には電流を通した電線が張ってあるから触れるな」と注意があったりした。

ソ連軍から機関銃が発射されている。その晩夜中まで敵情をうかがっていたら、古城鎮で部隊が戦闘しているの、夜中に「迂回して山に登れ」と命令があり、河を渡って山に登った。林口では大激戦があり砲煙で街が見えぬ程だった。我々は病馬廠で、前の騎兵でないので戦闘部隊ではないが、小銃などの装備はしていた。林口の戦闘では二百名ぐらいが戦死したと、後で会った生き残りの兵隊から聞きました。

その後、林口の山の裏を通り牡丹江への道へ出た。日本人も女も子供も沢山いて、牡丹江へと歩いていた。兵隊も一般人もゴチャゴチャになって歩いていました。

その頃から馬も車も荷物も捨てたが、兵は弾薬、防毒マスクを持って歩いた。九月三日牡丹江着、ソ連軍は既に入っていて橋も破壊されていると聞いた。我々は牡丹江の手前で粟飯を食べて、その間隊長は次の行動を考えたのでしよう。

河の中には沢山の兵隊の死骸が流れて来て、河の曲がり所には五十名ぐらい集まり漂っていた。そのような死体のかたまりが、河のあちこちにあり悲哀を感じました。隊は森林鉄道に沿って歩いた、その河を見ながら、これでは牡丹江へは近付けぬということになり、今度は横道河子（通化県）を目指して歩きました。森林鉄道の道を二日目、鉄橋の向こうから盜路を通る我が隊は物凄い射撃を受けた。我々の集団の先頭には兵隊がいたので何十人も兵隊が戦死したが、一般邦人の犠牲もあった。

そこで戦闘を初めて体験したので、次には道路を避け山の中を歩いた。横道河子への道は厳しい。山の上から下を見ると、日本軍が列車に乗せられている。日本人の工作員（共産党員やスパイ）が「山から降りて

来い。ウラジオオから日本へ帰す」とスピーカーで呼びかけていた。ソ連は工作員を使って嘘をついて、シベリアへと日本兵を誘い出して送っていたわけでした。

我々はその言葉に従わず、山から山へと通って横道河子へ、ソ連軍と会わぬように歩いた。ソ連軍は日本軍や日本人の通る道に待ち伏せて射ってくるのです。そのため、戦死する者も多く、また食料も無いのでだんだんと人は減っていき、大集団は中、小集団になってきた。我々の部隊も二百名が六、七十名になってしまいました。落伍者も出る、自殺者も出るのです。俘虜になるよりはと、銃で自決の道を選んだ兵隊もいました。山岳地帯に入っては女、子供はついていけなくなりました。道路脇に子供が殺されており、その先に女の人達が。

疲れ果てて死んだ人、出産したばかりの赤子が泣いていて、産婦がその先に倒れている。子供が「母ちゃん」と泣いているものもある。可哀想というより悲惨極まりない光景を見ても、我々も自分だけで精一杯で連れて行けない。裸になった子供が自分達の所へ寄って

来るのも見た。哀れなものだったが、そのうち満人に拾われた者が、今の残留孤児であるのだろうか。現在も、あの人達を新聞、テレビで見ると、心を痛ませています。

横道河子から満鉄を南に向かえば、吉林、奉天へ行けるが、鉄道にはソ連軍がいる。一週間ぐらい鉄道を突破しかねていて、大きな河に入って渡るのだが多くの人が流されてしまう。対岸に着いたら、誰々がいない、彼もいないと、集団はだんだんと少なくなる。食料もない、体は瘦せ細り戦友同士顔を見合わせるたび、哀れというか、悲しいというか、誰も話し合えませんでした。

河を渡りさらに南下して山に入ったら牡丹江の省境に出た。持参の地図（参謀本部）により吉林省五條県（日本の開拓団がいる）に近いと知ったが、小部落から射たれ二〜三人が戦死した。しかしそこを通らねばならないので、白旗を出して交渉した。そこは日系露人の部落だったが、銃を使わぬことを条件として通ることが出来ました。しかし、道が判らぬので聞きに

戻ったところ、また射たれ二〜三人戦死した。そこで日系露人の部落と戦争になり露人は逃げた。そのためそこで食料を補給して山に入り、一週間程で五條県に到着しました。

そこには田園があり、日本人開拓団員がいた。「我々は籠城している、武器をよこせ」という。だが、武器を渡すと追い出されるとの朝鮮人情報がありましたので、武器を渡さず、開拓団本部の側家に入り、久し振りに屋根の下で一泊することが出来ました。

開拓団を出て歩き出したら、向こうからアンペラ傘を被った乗馬の者に会った。その人は満服を着ていたが日本の見習士官で「日本軍降伏」を初めて聞かされお互いのがっかりした。日本国は残っているが無条件降伏だ、どうなっているか不安でした。我々も死のうかと思いました。その時隊員は六〜七十人になっていました。我部隊はさらに少なくなっていたが、他部隊の兵隊も入って来ていて、隊長は病馬廠中隊長の酒井中尉（北海道）でした。

見習士官は満語が話せるので部落の満人とも意志が

通じていて、彼自身の保身も心得ているようで敵性部落を避け次の部落へと案内するといっていた。

その後、中国の保安隊三十人ぐらいと会った。彼等は日本軍を共産軍との戦いに利用しようとしたらしい。保安隊に付いていくと豊満ダムの近くに出て部落に泊まりました。すると、中国軍保安隊千人ぐらいが部落を包囲し、武器を取られたので、抵抗は出来ない。その時日本語を知っている兵隊が「日本人は殺さぬ」と言ったので我々は正式に武装解除になったのです。先の見習士官は我々を保安隊に売ったのかも知れない。

それでも、ソ連軍でなく国府軍に武装解除されたので良かったと思つた。その後、保安軍の中に入れられ逃げぬよう監視されながら、二日間、雪の中を昼夜歩かされ、目的地の小部落へ連れていかれた。

その部落の学校の庭に我々は集められたら、村長が出て来て「農家に分散して皆に働いてもらう」というのであります。部落は海甸県金砂村という所だと聞かれました。隊長の訓示では「中国人に従わなかったら銃殺する」(通訳)ということであった。

隊員全員は農夫(作男か)というより農奴になり皆がそれぞれの家に連れていかれ、誰が何処に行ったか判らなかつた。私の部落には十人ぐらいで、一軒に一人か二人分配された。仕事は収穫後の整理作業を昭和二十一年二月頃までさせられたり、山へ出て燃料用の木の伐採などもさせられた。

三月になり「金山」へ兵隊たちはまとめて連れていかれた。私は真面目に働いたためか「村役場で働け」となり、ストーブ炊き、薪割り、掃除、謄写版刷りなどの他、役人の自宅の家を廻って水汲みなど命ぜられていました。国民党、親日派だった村長に、私は一生懸命仕事をしたので可愛がられていました。

中国人は一般的には兵隊を嫌ったり、恐がったりするといひます。その後、国民政府軍と共産軍との戦争が始まって、昭和二十一年六月頃には共産軍が優勢になりました。一時、共産軍が入って来て、朝鮮人の共産八路軍の者が副村長になったので、役場の人達の中国人も八道河子に連れて行かれ共産党の中に入れられたといふことでした。しかし、共産軍の支配は何日も

続きませんでした。それは国民政府軍が戦場で勝ち、親国府系の役場の人たちは戻って来たのです。

しかし、私は共産軍の撤退の時、馬車に乗せられ、真夜中、兵に監視され何時間か連れられていきました。私は何とか逃げようと思っていて、監視兵がいなくなった隙、馬車が橋を渡った時、河へ飛び降り、橋の桁につかまって隠れていました。車がガラガラと橋を通り過ぎたので、河を渡って戻り、夜の明けた頃役場に着くことが出来た。職員たちは「良かった」と迎えてくれましたが、若し共産軍に連れていかれたらどうなったか判りません。

その後、役場で働いていたが、役場の職員に「何とか日本に帰りたいが、朝鮮へ行った方がいいか、吉林がいいか」と聞くと、「朝鮮へは山の中で食料が無い、吉林へ行く方がいい」と教えられました。

そのうちに日本兵らしい人と会った。高橋少尉にも会った。高橋少尉は「私は工場で働いているので出られない。自動車と毛布二枚持っているが、誰か迎えに来てくれて、壁の向こうから縄を投げてくれ」という。

私は夜行ったら壁から縄が下がっている。それを引張ると自転車と毛布が出て来た。次に高橋少尉を引き揚げ、一緒に吉林へ行き、自転車を金に代えた。しかし、中国人が列車に乗せてやるから金を出せというのでその金を渡した。中国人は人混みの中へまぎれて逃げてしまった。

私共は職員に「日本人か」といわれたので「列車に乗るため中国人に金を渡した」と言うと、駅長に顔が曲がる程ビンタを取られました。金は取られビンタは貰うので途方に暮れていました。それでも何処かで働かねば食べていけないので、酒造工場で働いたが、仕事も言葉も判らないので二日で辞めました。

とにかく日本へ帰るために四平街へと鉄道線路に沿って三日ぐらい歩きました。ある駅の井戸端で水を飲んでいたら、中国人から「何処へ行くか」と聞かれたので「四平街だ」というと貨車に乗せてくれた。四平街で日本人居留民会へ行って「日本に帰りたい」というと「もう遅い」という。何とかお願いをしてやっと仲間に入れて貰うことが出来ました。出発まで、若

千働いてその金を居留民会へ出し、いよいよ「日本に帰れる、よかった」と初めて思いました。

八道河子で共産軍から逃げたのが良かった。共産主義は何処の国の人間も平等だというが、何時帰されるか判らない。満州で何人もの仲間が死んだが、生きて帰って有り難い。終戦後は無我夢中で南下していたが、残留孤児は可哀想でした。殺されたり、置き去りにされたりした。吉林では子供を背負って物乞いをしていたり、物を売ったりしていた婦人もいる。むごたらしいことでした。私はあの時、その人たちに言葉をかけることもできませんでした。